『フランス語』

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

2025（令和７）年度共通テストの『フランス語』は，2020年まで実施されたセンター試験の枠組みを受け継いだ2021年からの「共通テスト」を踏襲し，『筆記』試験を課し，リスニングテストは実施しないという方針の下，作成，実施された。今年度新課程対応のテストとして大きな変化のある教科ではないが，出題形式に，第３問と第４問の問題数の減少と，第７問と第８問の問題数の増加という配点の移動があったことは，その影響かもしれない。

共通テストになって５年目の今回のテスト結果は，受験者116名（前年度90名），平均得点は100点満点換算で65.29点（同62.68点），最高100点，最低８点（同100点，13点）であった。共通テスト５年目の節目に実施５年間の平均点の平均を算出すると，63.12点である。依然としてセンター試験時代のレベルではない。（センター試験時代のフランス語平均点の，最後の５年間の平均を算出すると70.55点になる。）

出題形式については，昨年度を踏襲している。今年度のフランス語共通テストも，基本事項を丁寧に問う工夫のある問題で，発音，語形変化における不規則なものについても，おおむね中等教育レベル内から出題された。

報告の方針

今回の報告は，上記の点を踏まえ，次の４点を分析の中心とする。

⑴　受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。知識があり，深く考えた結果，不正解になってしまうことがないか，ということを特に検討したい。少人数の集団が対象であるだけに，その点に関しては大人数の科目以上に要求が強くなるが，御理解を賜りたい。

⑵　特定の要素に偏らない，総合的な学力を問う問題であったか。

⑶　高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。

⑷　フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。

なお，評価に当たっては，21ページに記載の８つの観点により，総合的に検討を行った。

２　内　容・範　囲

フランス語を高等学校から選択学習する高校生の学習環境を考慮した問題作成を希望している。主な形式と内容は共に昨年度の共通テストを踏襲したものであった。

第１問　フランス語におけるつづり字と発音間の規則性を理解しているかを問う問題である。基本ルールを問う問題とみられ，こうした傾向が続くことを望む。

問１　語中の -c- の音を問う問題。④seconde は例外であるが基本語である。

問２　語末の -l あるいは -il の発音を問う問題。②，③，④は例外的な発音のため，「他の三つの場合と異なるもの」として出題されることが多い。ただし，②fusil は発音の例外としての出会いを除き受験者にとって実用的な語彙といえるかどうか。

問３　–en を問う問題。②examen は例外の代表的単語。

問４　g の発音を問う問題。後続する母音字の違いで発音も異なる。 c についても同様のことが言える。基本的知識が問われた。

問５　リエゾンを扱う枠である。④Quand 疑問詞は，例外的に est-ce que の前でリエゾンする。

同じ Quand でも，接続詞であれば母音の前でリエゾンが義務である。運用上，④は知っておくべきだが，リエゾンの知識として，まず覚えるべきは接続詞 Quand の場合ではないか。

第２問　派生語の知識，動詞の活用，語形変化，などを扱う単語レベルでの総合的な文法問題である。

問１　動詞から形容詞への変化を問うもの。その反意語を問われた。

問２　形容詞から名詞への変化を問うもの。

問３　形容詞の接頭辞をつける反意語を問うもの。基本問題である。

問４　動詞の活用，現在形から単純未来形への変化を問う問題。正答率は高くないが，On verra. などの会話表現でも記憶すべきもの。

問５　形容詞から副詞への変化を問う問題。形容詞の女性形に副詞の語尾をつけるのが原則というルールと，形容詞の女性形の例外的変化を知らなければ正解にたどり着けない。知識の正確さが問われた。

第３問　文中の空所に適語を入れる形式で，文法や語法の理解度を測る問題である。前年より問題数が２問減った。

問１　形容詞の男性単数形別形を問う基本問題。

問２　前置詞を問う問題。la rue との結び付きを問われた。

問３　不定代名詞を問う問題。否定文であることや動詞の時制を考慮する必要があった。

問４　主節が未来形であっても，条件節は現在形であるというルールが問われた問題。これが仮に sauf のない条件節から始まる文で，しかも主語が quelque chose de grave という長いものでなかったとしたら，問題が成立しないのかどうか。これらの幾つもの段階があるために，難易度の高い問題となった。

問５　文の形式からの判断で②を誤答する可能性もあるが，後続の文の内容に合わない。正解④現在分詞の否定形を選ぶためには，読解力だけでなく，文の形式へのより深い理解が要求される，難易度の高い問題。

第４問　引き続き，文中の空所に適語を入れる第３問と同じ形式。語彙の理解度を測る問題に特化している。前年より１問減った。

問１　語彙問題であるが，③を「抑える」という意味と理解するのは，なかなか難しい。①は，他動詞としては不適当であり，essayer de ともつながらないが，「涙が流れる」と読み間違えれば，誤答する可能性もあろう。よく練られた問題である。

問２　道や乗り物などの物を主語とした mener の用法を問う問題。動詞単独の意味を覚えるだけでなく，文の形で定着しているかが問われた。

問３　副詞句を問う問題。de bonne heure 「朝早く」は熟語表現で，知識が問われた。類似表現 de grand matin を知っているとその連想から④を誤答する可能性もあるか。

問４　名詞を選ばせる問題で選択肢の意味が分かれば解ける問題。連語としては当然知っておくべきものと言えるが，フランスでの生活体験の有無が影響する可能性のある問題でもある。

問５　une nuit blanche 「眠れない夜，徹夜」を問う難問。この熟語を知らなければ解けない問題であり，知識が問われる問題である。上の問３も同様の問題であるが，この問５はレベルが一段上と言うべきだろう。色を使った表現を問う出題自体に異論はない。その場合も，色とイメージが結び付きやすい表現が望ましい。

第５問　対話文を完成させる問題であり，４技能の総合的な育成が求められている中で，会話体の出題にもますます工夫がされていることと推察する。

問１　選択肢が全て同じようなリアクションで始まるので，判断すべきは後半の部分となり，

③，④の間接疑問文の内容で考える。使われている語彙的にも難しくない。

問２　正解③の remplir は，「満たす」という意味を思い出してしまうとつまずく可能性もあるが，他の選択肢に紛らわしいものはない。

問３　③fréquentée は動詞の fréquenter の意味，④monde は文脈の中での理解を，それぞれ問う問題。他の語彙も，状況に即した自然な使われ方をしており，受験者の単語力を測る問題になった。

問４　Ａの２番目のせりふの dire は penser と同義で要注意語彙。他に注意すべき用法としては，Cela me dit quelque chose.「それは見覚えがある」や，Cela vous dit de + inf.「いかがですか」などが過去にも出題されている。

問５　高校生には親しめる状況設定だった。②の知覚動詞 ＋ 不定法の構文や，③の否定の強調 du tout なども基本事項。

第６問　整序作文。和文仏訳で，自らの考えを述べる自由作文の前段階として，文法や構文を中心とした作文力を問う問題である。並べ替えの語（句）の単位は６個，問うのは４番目の語（句）というルールで統一されている。日本語とフランス語の間の発想の違いが問題のポイントになると難易度が上がる。文頭と最後がフランス語で示されることで，出題ポイントがはっきりするこの形式の継続を望む。

問１　前半部分は使役用法の faire + 不定法の語順，後半は「～の西に」という前置詞句の語順がポイントとなる。

問２　trop ~ pour + 不定法の相関語句を問う問題。assez ~ pour + 不定法と並ぶ最重要熟語の一つ。基礎力の大切さを受験者に伝える良問。

問３　前半部分の条件法過去形，後半部分の接続法と動詞を軸に視点を捉えれば，正解に至る。

問４　dire à qn de + 不定法「...するように言う」がくめれば整理できただろう。

問５　rendre visite à ~ は記憶すべき熟語であるが，その際の名詞 visite が無冠詞であること，動詞の活用形と形が同じ，など定着しづらい要素がある。正答率は低い。

第７問　情報処理能力を問う問題で，与えられた情報から判断し発信できるかが問われている。今年度はＡ「ブックフェアについての案内」，Ｂ「シャンプーに関する雑誌記事」が主題に取り上げられていた。Ｂに比べると，Ａは受験者にとって実生活に直結する主題ではないかもしれないが，資料活用問題として取り組みやすいものであった。

Ａ　案内文にある ainsi que や les passionnés ， les nouveautés などで，つまずく受験者は少なくないと思われる。

問１　案内文の内容に関する文章の空所補充。[a]は，フェアの開催期間が読み取れるかどうか，[b]は，参加者についての記述を読み取れるかが問われた。設問は，作家，アーチスト，出版社がフェアを主催して，来客を迎えるという関係性の把握を要求された。

問２　この作家の関心事が環境問題，とりわけ気温の変化にあることが分かれば，「気候の危機」をタイトルに含む小説を書いた作家を選ぶことができる。

問３　ホールの配置図の読み取り問題。「[a]の前を通ってから，次に[b]を右に曲がって，まっすぐ」という道筋を読み取れれば，いきなり Zone jeunesse の前を通過したり，Toilettes まで行くコースが不自然と分かるが，配置図の Entrée の間口の広さを誤解したり，objets trouvés 遺失物係のような単語に理解がないと正解できない。

問４　①が適当でないことが分かるには，annulé の意味を知らないといけない。②は lire→lecture の語形変化，③は d'horreur が qui font peur と同義であること，⑥は rédaction→rédiger の語形変化を理解することが必要。

B　冒頭から，Monshampooing が商品名であり，shampooing maison は「手作りシャンプー」を意味しているなどの状況把握に，受験者がまごつく様子を想像した。さらに，日本語で「雑誌の記事」とあるものが実は商品広告記事であるなどの小さなずれで，負担が重なることになったと感じる。

問１　une cuillère de～ という分量がヒントになる。

問２　「卵黄」はオプションの部分から読み取ると，「ハチミツ」と同時に加えるとある。ハチミツは，「混合物」を数分冷ました後に加えるので，①が正解。資料全体に目配りできるかが問われる問題。

問３　Alice はフルーツ（入りのシャンプー）だけが好きで，Barbara は花（入りのシャンプー）は好きではない。つまり，二人とも花は好きではないことになる。そして，「今だけのプレゼント」はバイオレット，すなわち花のシャンプーであり，二人の好みには合わないので，②が正解。解に至るステップが複雑で，正答率は大変低い。

問４　①シャンプーの作り方に続く追記部分の avocat 記述にある rendre A B 「A を B にする」が読み取れれば，avoir le(s) A B「B である A をもつ」と同義であることが分かる。②完成品の shampooing を思い浮かべて liquide と誤答する可能性はあるが，落ち着いて読み進めれば間違いと分かる。③progressivement と petit à petit が同義である，という認識が必要。④de l'huile essentielle は入れるが，「最初」ではない。Espérance という人名は，社会の多様性を反映しているようで興味深い。⑤レモンは入れるが，「搾り汁」であって「皮」ではない。⑥「よく混ぜ合わせてから瓶づめをする」というレシピの内容とは異なる。

第８問　自動翻訳と人間による翻訳を比較しつつ，今や好むと好まざるとに関わらず，不可欠な存在になった自動翻訳について考察したエッセー。

問１　[a] は fantaisie と solution の２択だが，前者をファンタジーという日本語で考えると，空想，幻想という意味になるので，後者が適当となる。もっとも，辞書には fantaisie の意味として「独創性」などもあり，見かけほど易しくない。sans intervention [b] は automatique の意味を考えるなら，「『人間の』介入のない」，となることが分かる。

問２　「幾つかの厄介事」の具体例を問う問題。①，②は「薬局で自分の症状を説明できない」場合を記述した文から２文を作ったもので，それぞれに不完全。③の内容は本文にない。③，④の適否を判断する際に参照すべき箇所に，se retrouver が使われているが，読み取りが難しい。

問３　「今日，携帯は自動翻訳のおかげで，こうした厄介事を（　　）することを可能にする」。意訳をすれば，「(…) こうした厄介事を（　　）してくれる」。つまり，携帯がここで為すことは，プラスの内容になるはずなので，①，③，④は不可。ただ，étendre を éteindre と見誤ると，「厄介事をなくしてくれる」という解釈もできてしまい，誤答もありうる。

問４　[c]，[d] の前文を見ると，「果たして自動翻訳がもたらすのは利点だけなのか。それは全くの事実とは言えない」とあるので，自動翻訳が不利益ももたらすことがあるという文の流れが続くことが予想できる。後続の文は「たとえ～であっても，...だ」となっているので，～の部分に自動翻訳の利点が述べられ，...の部分に主旨である自動翻訳の不利益が述べられるはずだ。そう考えれば，[c] はプラスの意味の形容詞，[d] はマイナスの意味の形容詞が入る。論理の道筋をきちんとたどることの重要性を再認識させる良問。

問５　En effet が理由や，主張を裏付けるような文を導くことに留意しつつ，後続の文を読み解けばよい。自動翻訳に対する批判として，まず情報を文脈と関連付けることができないこ

と，次に言葉のニュアンスや言葉遊びなどを正確に訳せないことが挙げられている。

問６　手掛かりとしての後続の文が Contrairement で始まり，その文中にある代名詞 la を指示する語が選択肢の中にあるという点で，難易度が高い。その文の手前にも Par ailleurs があり，また続きに Néanmoins の展開がひかえていて，文脈の把握が出題された。解答の選択肢の中にある，キーワード④indispensable を適切につかめるかもポイントとなった。

問７　前の箇所で，人間による翻訳が自動翻訳を上回っていることが述べられた後で，「しかしながら」と逆接の接続詞が使われて自動翻訳の利点が挙げられる。 47 の後には，そうした２種類の翻訳を結び付けることで，あらゆるユーザーに利益をもたらすとする。こうしたことから考えると，内容をまとめる働きのある語句を選ぶことになる。このようなつなぎの語句を選ぶ力は受験者が目指すところだが，同時に多義語の compte の理解も求められていて難易度は高い。

問８　内容一致問題。用いられている単語，熟語とも平易であり，言い換え部分も，解きながら学びが得られるものとなっている。ここでも多義語の compte が出題語になっていた。

問９　「本文全体」のタイトルという点がポイントで，一部の内容を強調するだけでは十分とは言えない。読み込んだ者が正解に行き着く良問だった。

３　分　量・程　度

昨年度からの変更点，第３問と第４問の問題数及び配点の減少［20→15%］と，第７問と第８問の問題数及び配点の増加［40→45%］という配点の移動は，フランス語の運用能力を幅広く問うという共通テストのねらいを体現した出題としての工夫と受け止めているが，解答する立場としては「分量の増加」と言える。第３問と第４問は文法や語彙を問う比較的シンプルな出題であるが，それが減少し，第７問と第８問の資料読み取り及び長文読解という思考力を測る目的の出題の増加は，そのまま解答により多くの時間をとられる出題の増加に当たるからだ。緩やかな変化とはいえ，限りある時間枠でのこの変更は受験者への不利益につながりかねない。試験制限時間の増加がないままのこうした傾向が定着することは見過ごせない。

４　表　現・形　式

全問にわたって，基本的な問題，例外を扱った問題，応用力・読解力を必要とする問題がバランス良く出され，素直にフランス語を読み，それに自分の経験，体験を生かして解答を求められる傾向が見られた。また「〇〇でないものを選ぶ」という解答をより難解にする問い方もなく，「最も適当な〇〇を選ぶ」ストレートな問い方であったことは好ましい。そのため，受験者にとって知識として定着していなかった部分が的確に問われ，指導者側も更に正確に，確実に指導すべきところがあぶり出される結果であると受け止めている。

その上で，今後の出題に関して以下の点に御考慮をお願いしたい。まず，報告の方針(1)にあるように，受験者が深く考えた結果，不正解になってしまうような問題は避けていただきたいという点である。具体的には２点あり，第一は第３問の問４である。情報量を減じても，識別力のある問題文となり得ると思われる場合には，よりシンプルな文にしていただきたい。第二は第４問の問５である。une nuit blanche を問う問題は，基本知識が応用できないレベルの知識を問うものだった。基本的な問題の出題方針を今後も維持していただきたい。

以上，細かい指摘となって大変恐縮ではあるが，御考慮いただければ幸いである。

５　ま　　と　　め（総括的な評価）

今まで学習した文法事項，語彙力を問うだけではなく，それを生かして読解し資料を利用して答え，さらに表現を求める方向が，正に「共通テスト」の目指す内容であった。また，特別な海外生活体験を持たずに，学校の授業でのみフランス語を学んできた生徒たちが，おおむね対応できる問題であったと言える。受験者数が少ないにもかかわらず，このような適切な問題を作ってくださる問題作成部会の方々に深く感謝申し上げたい。

ただ，５年目になる共通テストの傾向をふりかえると，それ以前のセンター試験時代とで大きく異なるのが，平均点である。今年度は，フランス語平均点は昨年度よりも上がったが，センター試験最後の５年間のフランス語の平均点には大きく及ばない。この違いは，“平均値はその母数が少ないほど個人の数値の大小に影響されやすい”という原則を踏まえたとしても，誤差と片付けるわけにはいかない。この数値の比較から，フランス語についてセンター試験から共通テストへの難化が見て取れる。一方英語については，センター試験から共通テストへの移行に際し，平均点にほぼ差がなかった。このことから，難化はなかったと言えよう。この結果について，受験する高校生の実態に出題レベルが合っていないための結果なのではないか，と考えている。フランス語受験者の層がセンター試験及び共通テスト全受験者の上位層であることは，歴代の評価委員たちが繰り返しお伝えしてきた。英語よりもフランス語の平均点が高くあるのは，難度が低いのではなく母集団の違いと説明できるからである。つまり，この数年の出題はバランスのとれた問題であったと評価はしてきたが，もっと基本重視の出題であるべきなのではないか，とお伝えしたい。それこそが現実の受験者の力を適正に点数化するものさしになるだろうと考える。よく取り組んだ者が適正に評価される，テスト本来の目的に沿った良問の増加を望む。

フランス語を第一外国語として履修できる高等学校同士は，お互いに連絡を取り，情報を共有するよう努力を続けている。どの学校も抱える喫緊の問題は，「大学受験科目としてのフランス語」が今後どのようになっていくのかである。今年の受験者は昨年度から僅かに増加した。教育改革の荒波の中で，情報が得られにくい科目をあえて選ぶ，知的好奇心に満ちた若者たちが育ってきている。「英語だけ」を学習した生徒よりも，「英語も」学習した「フランス語」受験者は，物事に対してよりグローバルな視野を持っていると言える。多様性の重視が自分たち世代には欠かせないという感覚を既に持ち合わせているのだ。

この場をお借りして大学関係者の方々にお願い申し上げたい。是非『フランス語』受験者の大学入学受験機会の増大を御検討いただきたい。こうした知的好奇心・学習意欲にあふれた生徒の受験機会が増加に転じることで，『フランス語』受験者が増加し，大学に一層の多様性がもたらされることを願う。各大学が多言語試験を実施することは，日本の教育のグローバル化を進める一助になる，と確信する。

そして，その際は「共通テスト」を利用していただくことができる，と繰り返しお伝えする。共通テストは，受験者の実力を測る識別力の高い問題である。その共通テストを現在のみならず将来のフランス語学習者のためにも，大学教育の入り口として今後も幅広く実施・利用していただきたい。